

## 平成 15 年カタクチイワシ瀬戸内海系群の資源評価

責任担当水研：瀬戸内海区水産研究所（河野悌昌、銭谷 弘）

参 画 機 関：和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場、大阪府立水産試験場、兵庫県立農林水産技術センター水産技術総合センター、岡山県水産試験場、広島県水産試験場、山口県水産研究センター内海研究部、福岡県水産海洋技術センター豊前海研究所、大分県海洋水産研究センター浅海研究所、大分県海洋水産研究センター、愛媛県中予水産試験場、愛媛県中予水産試験場東予分場、香川県水産試験場、徳島県立農林水産総合技術センター水産研究所

### 要 約

瀬戸内海に分布するカタクチイワシの資源量は 1983 年に 42 万トンで最大となった後、1997 年まで漸減した。その後、増加傾向にあり、2002 年の資源水準は中位である。2003 年と 2004 年の各月の加入尾数が 2001 年と 2002 年の各月の平均値と同じであると仮定した場合に、現状の  $F$  よりやや小さい  $F$  で漁獲される漁獲量を  $ABC_{\text{limit}}$  とした。2004 年の加入尾数が 2003 年の 8 割と仮定した場合に、さらにやや小さい  $F$  で漁獲される漁獲量を  $ABC_{\text{target}}$  とした。

	2004 年 ABC	資源管理基準	F 値	漁獲割合
$ABC_{\text{limit}}$	79 千トン	$0.85F_{\text{current}}$	0.89	40%
$ABC_{\text{target}}$	78 千トン	$0.8 \cdot 0.85F_{\text{current}}$	0.71	36%

年	資源量(千トン)	漁獲量(千トン)	F 値	漁獲割合
2001	187	62	0.93	33%
2002	188	77	1.15	41%
2003	148	-	-	-

$F$  値は 1 月齢魚の 1~12 月の平均値である。

資源量は各月の資源量を合計した値である。

2003 年の資源量は加入量を仮定して計算した値である。

( 水準・動向 )

水準：中位 動向：増加

### 1. まえがき

本資源は主に中型まき網や船曳網・パッチ網によって漁獲される。小規模漁業が大多数を占める瀬戸内海ではカタクチイワシ漁業の投資規模は大きい部類に入る。瀬戸内海におけるカタクチイワシの漁獲量は 1970 年代から 1980 年代にかけて全国の 33% を占めていたが、最近 5 年間では 8% に減少している。シラスの漁獲量は 1970 年代以降、全国の 40% を占めており、シラスを対象とした漁業が発達している。

### 2. 生態

( 1 ) 分布・回遊

カタクチイワシ瀬戸内海系群は、太平洋南区春季発生群と内海発生群との混合資源である（高尾 1990）。太平洋南区春季発生群は3~5月に薩南海域から土佐湾で生まれ、黒潮によって輸送される際、その一部が瀬戸内海に補給される（図1）。春から秋に瀬戸内海で成長し、外海へ出て越冬し、翌春産卵する。内海発生群は夏から秋に瀬戸内海の各海域で生まれ、瀬戸内海で成長する。大部分は外海へ出て越冬するが、一部は瀬戸内海に残ると考えられている。翌春、瀬戸内海に来遊して産卵する。

#### （2）年齢・成長

孵化後、半年で約9cm、1年で約11cmに成長する（横田・吉川 1952, 土井ら 1978; 図2）。寿命は2年程度と考えられる。

#### （3）成熟・産卵生態

1歳でほとんどの個体が成熟する。産卵はほぼ周年で、主産卵期は5~9月である。薩南海域から土佐湾、瀬戸内海のほぼ全域で産卵する（服部 1982, 落合・田中 1986, 高尾 1990; 図1）。

#### （4）被捕食関係

カイアシ類などの小型の甲殻類を主な餌とする。サワラ、スズキ、サバ類、タチウオなどの魚食性魚類に捕食される（落合・田中 1986, Kishida 1986）。

### 3. 漁業の状況

#### （1）主要漁業の概要

漁場は紀伊水道から伊予灘までの各海域で形成される。操業期間は外海に近い海域でほぼ周年、瀬戸内海中央部で春から秋までである。海域によっては、加工に不向きな油イワシの出現や不漁のために休漁する場合がある。上述したように、太平洋南区春季発生群の一部が瀬戸内海に補給される。したがって瀬戸内海東部の春季におけるシラス漁獲量の多寡は、太平洋南区春季発生群の水準と黒潮の離接岸による。

#### （2）漁獲量の推移

1955~2002年の平均漁獲量（シラスを含む）は8万トンである。1955~1986年までカタクチイワシの漁獲量は比較的安定し、シラスは増加傾向を示していた。1986年にカタクチイワシ9万3千トン、シラス5万3千トンが漁獲された。その後は減少傾向を示し、1990年代後半はカタクチイワシ、シラスとも2万トン前後で推移した。2001年にそれぞれ3万6千トン、2万6千トン、2002年に4万3千トン、3万4千トンと近年、増加傾向にある（図3、付表1）。1978年以前では瀬戸内海の東部（備讃瀬戸以東）、西部（燧灘以西）とも小羽から大羽の漁獲量がシラスの漁獲量を上回っていた。しかし東部では1986年以降、シラスの漁獲量が小羽から大羽の漁獲量を上回るようになった。西部でもシラスの漁獲割合が高まっている。

### 4. 資源の状態

#### （1）資源評価方法

月別月齢別漁獲尾数データを用いたコホート解析により月別月齢別資源尾数を推定した（補足資料1-1）。また卵数法により年別年齢別資源尾数を推定した（補足資料1-2）。

## (2) CPUE・資源量指標

主にシラスを漁獲対象とする船曳網の代表漁協と標本船におけるカタクチイワシシラスの CPUE は 1999～2000 年に高かった。2001 年に減少したが、2002 年にやや増加傾向がみられた（図 4）。

1980～2002 年の年間産卵量は 189～1,203 兆粒（平均 568 兆粒）で推移した（図 5、補足資料 1-3）。その変動は大きく、1999 年、2000 年にそれぞれ 1,203 兆粒、806 兆粒と多かったが、2001 年には 446 兆粒に減少した。2002 年には再び増加し、1,087 兆粒となった。

## (3) 漁獲物の年齢（体長）組成の推移

漁獲重量では 0 月齢魚が 11～45% を占めている（図 6）。漁獲尾数では 0 月齢魚が 84～94% を占めている（図 7）。

## (4) 資源量の推移

コホート解析では 1981～2002 年の資源量を推定した（図 8、付表 2）。資源量は 1983 年に 42.4 万トンで最大となった後、1997 年の 9.7 万トンまで漸減した。その後は増加傾向を示しており、2002 年には 18.8 万トンとなった。漁獲割合は 23～53% と高く、特に 1984～1990 年にかけて 40% 以上の年が続いた。卵数法では 1985～2002 年の資源量を推定した（図 9、付表 3）。両方法による推定値の変動傾向は比較的よく一致していた（図 10）。コホート解析で得られる結果は卵数法よりも期間が長く、かつ月齢単位での解析を可能とする。よって以下ではコホート解析による推定結果をもとに解析をすすめた。

加入量（0 月齢魚の資源尾数）は 1983～1991 年にかけて 0.6 兆尾以上の年が続いた後、減少し、1998 年は 0.4 兆尾となった（図 11）。その後は増加傾向を示し、2002 年には 0.6 兆尾となった。産卵親魚量は 1983 年に 13.0 万トンとなった後、1984 年に 1.1 万トンに急減した。その後は 1985 年と 1991 年にみられた急増以外は低い水準で安定していた。1997 年以降は増加傾向にあり、2002 年には 3.5 万トンとなった。

RPS は 1984～1990 年の間、高い年が多かった（図 12）。1991 年に減少した後、増減を繰り返し、2000 年以降はやや増加傾向にある。

産卵親魚量と加入尾数との関係を検討したところ、明確な再生産関係は認められなかった（図 13）。1984～1990 年には産卵親魚量が少なかったが加入尾数が多くなった。この間の比較的多い資源量は、高い RPS に支えられていたことによる。一方、1992～1998 年には産卵親魚量が少なく、加入量も少なかった。1999 年以降は産卵親魚量、加入量ともやや増加した位置にある。

自然死亡係数 M の変化が資源量推定値に与える影響をみるために、各月齢の M を変化させて資源量、加入量、産卵親魚量を計算した。M を 30% 増減させた場合、資源量はもとの M で推定した値の 83～125% であり、1999～2000 年に影響が大きかった（図 14）。M を 30% 増減させた場合の加入量はもとの M で推定した値の 86～120% であり、加入量の少ない 1981～1982 年に影響が大きかった（図 15）。M を 30% 増減させた場合の産卵親魚量はもとの M で推定した値の 82～126% であり、1999～2000 年に影響が大きかった（図 16）。

## (5) 資源水準・動向の判断

資源水準は過去 20 年の漁獲量、資源量から中位、資源動向は最近 5 年間の漁獲量、

資源量から増加と判断された。

## 5. 資源の変動要因

### (1) 資源と漁獲の関係

漁獲死亡係数  $F$  は 0 月齢魚で特に高いが、1999 年以降、減少傾向にある（図 17）。1990 年以降の 2 月齢以上の  $F$  は 1980 年代と比較して低いが、最近年やや増加している。カタクチイワシ瀬戸内海系群の分布域は太平洋系群や対馬暖流系群と比較して瀬戸内海という限られた範囲であり、高い漁獲圧がかかっているものと考えられる。ただし最近年の太平洋系群の資源水準は高く（石田ら 2001、石田ら 2002）、瀬戸内海に入り込む資源が増加しているために漁獲対象となる資源が増加傾向にあると考えられる。

1 月齢魚の  $F$  の平均値を横軸として %SPR と YPR を図 18 に示した。現状の  $F$ （2001 年と 2002 年の各月 1 月齢の  $F$  の平均値）は 1.04 であった。瀬戸内海では全長 10mm 程度の 0 月齢からシラスとして漁獲され始めるので加入は 0 月齢であり、6 月齢から成熟が開始すると仮定しているので、%SPR はかなり低い。現状の  $F$  での %SPR は 0.1% であった。

## 6. 管理目標・管理基準・2004 年 ABC の算定

### (1) 資源評価のまとめ

資源量は 1997 年以降増加傾向にあり、中位水準である。 $F$  は経年に高いが、太平洋系群の資源水準が高いために現在の水準が保たれているものと考えられる。

### (2) 資源管理目標

今後の加入尾数が 2001 年と 2002 年の各月の 0 月齢魚資源尾数の平均値と仮定し、現状の  $F$ （2001 年と 2002 年の各月の各月齢魚の  $F$  の平均値）で漁獲し続けた場合、2004 年の資源重量は 2002 年の 86% に減少する。現在の資源水準は中位であり、この資源量を維持することを目標とする。

### (3) 2004 年 ABC の設定

産卵親魚量は明らかであるが再生産関係は不明確である。資源状態は中位で増加傾向にあるので、管理基準には「ABC 算定のための基本規則」の 1-3)-(2)を適用した。ABC 算定のための式は以下の通りである。

$$F_{\text{limit}} = \text{基準値} (F_{30\%}, F_{0.1}, M \text{ 等}) \text{ か現状の } F \times \gamma_1$$

$$F_{\text{target}} = F_{\text{limit}} \times \gamma_2$$

ABC<sub>limit</sub> 算定には

$$F_{\text{limit}} = \text{現状の } F \times \gamma_1$$

を適用した。 $\gamma_1$  は 1 以下の係数であり、資源の回復の程度などにより決定される。ここでは漁獲圧をやや抑えるため、 $\gamma_1 = 0.85$  とした。 $\gamma_2$  は標準値の 0.8 を使用した。2004 年の ABC を設定するにあたり、以下のように仮定した。

- ABC<sub>limit</sub> を算定する際、2003 年と 2004 年の各月の加入尾数は 2001 年と 2002 年の各月の 0 月齢魚資源尾数の平均値とした。ABC<sub>target</sub> を算定する際には不確実性を見込んで、2003 年の各月の加入尾数は 2001 年と 2002 年の各月の 0 月齢魚資源尾数の平均値、2004 年の各月の加入尾数は 2003 年の 8 割とした。

- ・ 2003 年の各月各月齢魚の  $F$  は、2001 年と 2002 年の各月各月齢魚の  $F$  の平均値  
2003 年の各月各月齢の  $F$  に係数を乗じて 2004 年の各月各月齢の  $F$  とし、2004 年の資源量や ABC を算定した（付表 4）。

$F_{\text{limit}}$  で漁獲した場合、2004 年の資源重量は 2002 年の 106%、19.9 万トンとなる。2004 年の ABC は下表のように算出された。また、このときのシラスとカタクチイワシ別の ABC を付表 5 に示した。

	2004 年 ABC	資源管理基準	F 値	漁獲割合
$ABC_{\text{limit}}$	79 千トン	$0.85F_{\text{current}}$	0.89	40%
$ABC_{\text{target}}$	78 千トン	$0.8 \cdot 0.85F_{\text{current}}$	0.71	36%

F 値は 1 月齢魚の 2004 年 1~12 月の平均値

#### (4) F 値の変化による親魚量及び漁獲量の推移

前提  $F$  (2003 年) =  $F_{\text{current}}$  (2001 年と 2002 年の各月各月齢魚の  $F$  の平均値)、漁獲量 (2003 年) = 66,206 トン、2003 年と 2004 年の各月加入尾数 = 2001 年と 2002 年の各月 0 月齢魚資源尾数の平均値

$F_{\text{sus}}$  は現状 (2002 年) の産卵親魚量が 2004 年に維持されるような  $F$

F	基準値	漁獲量 (千トン)		親魚量 (千トン)
		2004	2004	
0.00		0		310
0.04	$0.1F_{\text{sus}}$	79		234
0.08	$0.2F_{\text{sus}}$	126		179
0.12	$0.3F_{\text{sus}}$	153		138
0.17	$0.4F_{\text{sus}}$	166		109
0.21	$0.5F_{\text{sus}}$	171		86
0.25	$0.6F_{\text{sus}}$	169		70
0.29	$0.7F_{\text{sus}}$	165		57
0.33	$0.8F_{\text{sus}}$	159		48
0.37	$0.9F_{\text{sus}}$	152		40
0.42	$1.0F_{\text{sus}}$	144		35
0.89	$2.1F_{\text{sus}}$	79		13
ほぼ $F_{\text{limit}}$ に相当				
1.04	$2.5F_{\text{sus}}$	67		11
ほぼ $F_{\text{current}}$ に相当				

#### (5) $ABC_{\text{limit}}$ の検証

加入尾数と  $M$  の変化が ABC に与える影響を検討した。2004 年の加入尾数を 30% 減少させた場合、2004 年の  $ABC_{\text{limit}}$  は 55,284 トン (30% 減少)、30% 増加させた場合 102,671 トン (30% 増加) となった（図 19、付表 5）。また  $M$  を 30% 減少させた場合 2004 年の  $ABC_{\text{limit}}$  は 81,134 トン (3% 増加)、30% 増加させた場合、77,366 トン (2% 減少) となった（図 20、付表 5）。 $ABC_{\text{limit}}$  の変動割合は加入尾数や  $M$  の変動割合の範囲内であるが、加入尾数の変化の方が ABC に与える影響が大きい。

#### (6) 過去の管理目標・基準値、ABC(当初・再評価)のレビュー

評価対象年(当初・再評価)	管理基準	資源量	ABC <sub>limit</sub>	ABC <sub>target</sub>	漁獲量	管理目標
2002年(当初)	$F_{30\%SPR}$ (1.08)	97	35	30		SSBの維持
2002年(2002年再評価)	$0.8F_{30\%SPR}$ (0.75)	107	30	25	76	SSBの維持
2002年(2003年再評価)		188				
2003年(当初)	$0.8F_{30\%SPR}$ (0.75)	105	28	23		SSBの維持
2003年(再評価)	$0.85 F_{current}$ (0.89)	148	66	66		資源量の維持

資源量、ABC、漁獲量の単位：千トン

#### 7. ABC以外の管理方策の提言

高場(1999)が指摘しているように、カタクチイワシ、シラスとも漁獲量を増加させるためには解禁日や漁期を遅らせ、成長させてから漁獲するという方策が考えられる。この方策は瀬戸内海中央部の燧灘で一時行われ、実際に漁獲量は増加した。しかし他海域での豊漁や品質の低下により魚価が低下し生産高が増加しなかったため、必ずしも漁業者に受け入れられなかつたという経緯がある。しかし資源の有効利用という点から見れば引き続き、これらの方策を推進していくことが重要である。

#### 8. 引用文献

- 石田 実・三谷卓美・上原伸二・本多 仁(2001) 平成13年カタクチイワシ太平洋系群の資源評価. 我が国周辺水域の漁業資源評価, 水産庁増殖推進部・独立行政法人水産総合研究センター, 395-407.
- 石田 実・三谷卓美・上原伸二・本多 仁(2002) 平成14年カタクチイワシ太平洋系群の資源評価. 我が国周辺水域の漁業資源評価, 水産庁増殖推進部・独立行政法人水産総合研究センター, 398-422.
- 土井長之・高尾亀次・石岡清英・林 凱夫・吉田俊一(1978) 6.浮魚類資源解析調査. 昭和52年度関西国際空港漁業環境影響調査報告 第三分冊 漁業生物編, 社団法人日本水産資源保護協会, 176-198.
- 服部茂昌(1982) 3.瀬戸内海におけるカタクチイワシ卵の分布. 水産海洋研究会誌, 41, 39-44.
- Kishida, T. (1986) Feeding habits of Japanese Spanish mackerel in the central and western waters of the Seto Inland Sea. Bull. Nansei Reg. Fish. (20), 73-89.
- 落合 明・田中 克(1986) 新版 魚類学(下). 恒星社厚生閣, 1140pp.
- 高尾亀次(1990) 瀬戸内海におけるカタクチイワシの回遊・産卵. 水産技術と経営, 3, 9-17.
- 高場 稔(1999) 広島県東部海域におけるカタクチイワシ資源尾数の推定. 広島県水産試験場研究報告, (20), 15-19.
- 横田滝雄・古川一郎(1952) 日向灘イワシ類資源の研究 第 報 カタクチイワシの脊椎骨の変異と生長について. 日本水産学会誌, 17, 60-64.

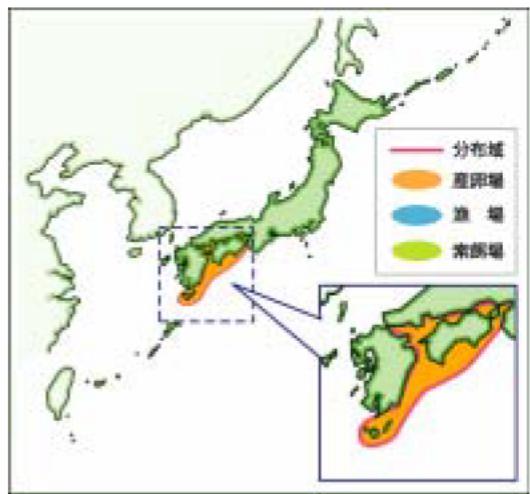


図 1 分布と産卵場

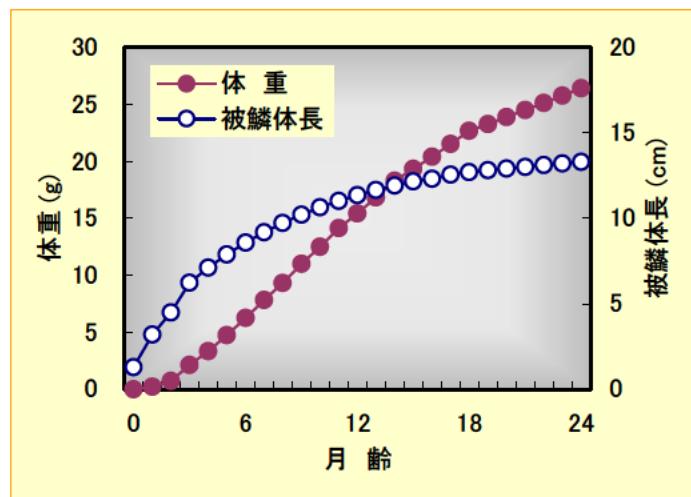


図 2 月齢と成長

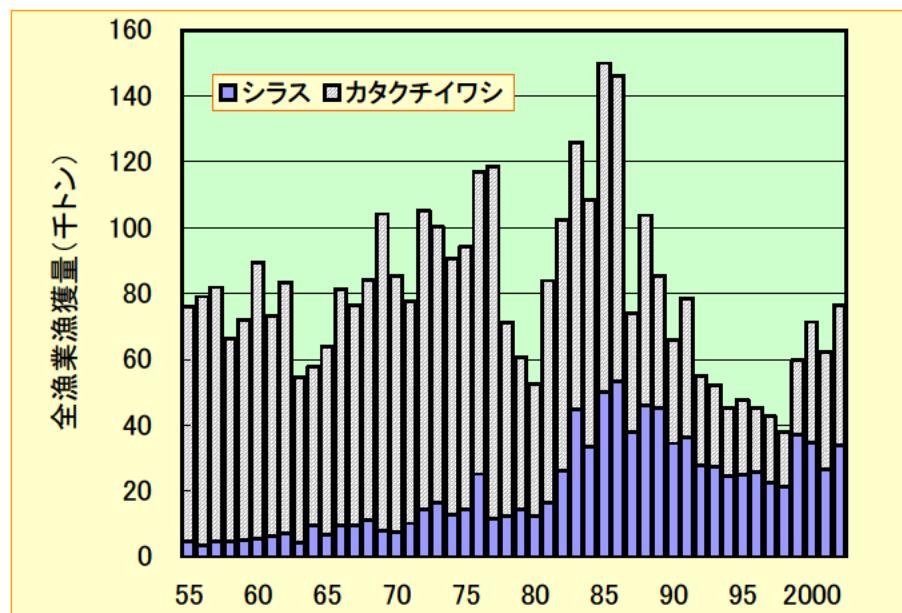


図 3 カタクチイワシとシラスの漁獲量の経年推移

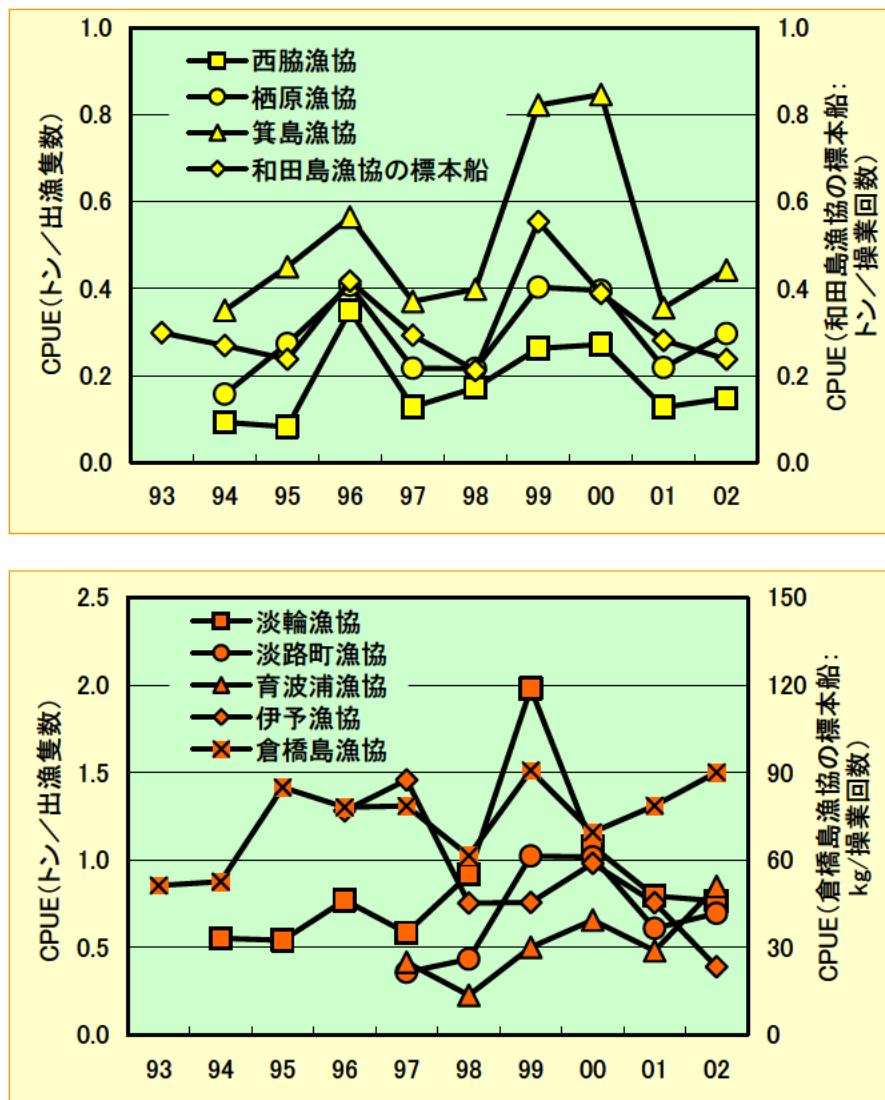


図4 船曳網代表漁協と標本船におけるカタクチイワシシラスのCPUEの経年推移

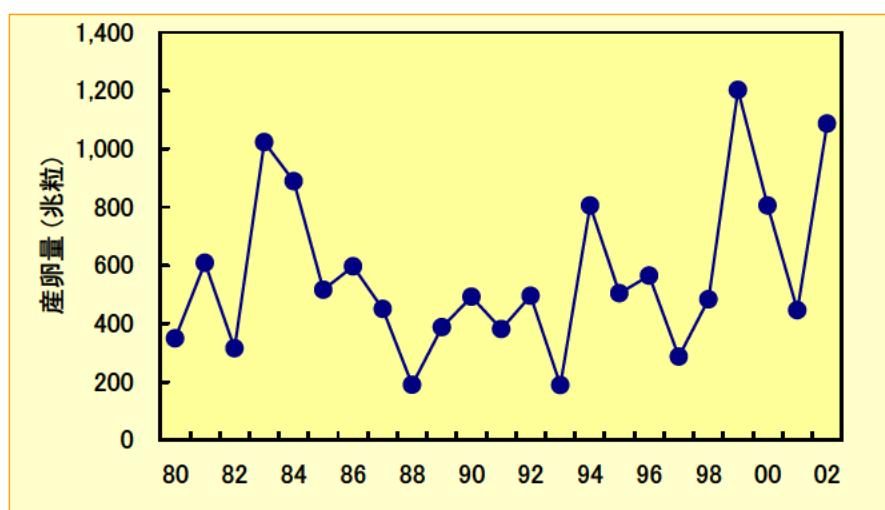


図5 産卵量の経年推移

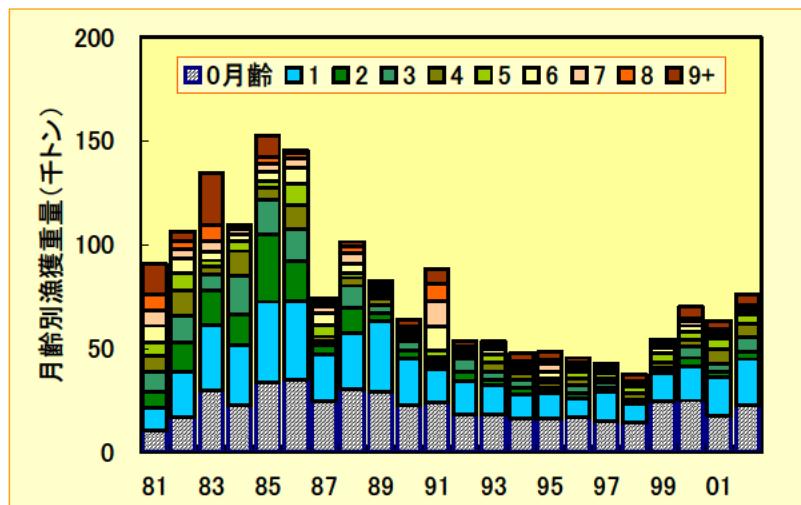


図 6 月齢別漁獲重量の経年推移

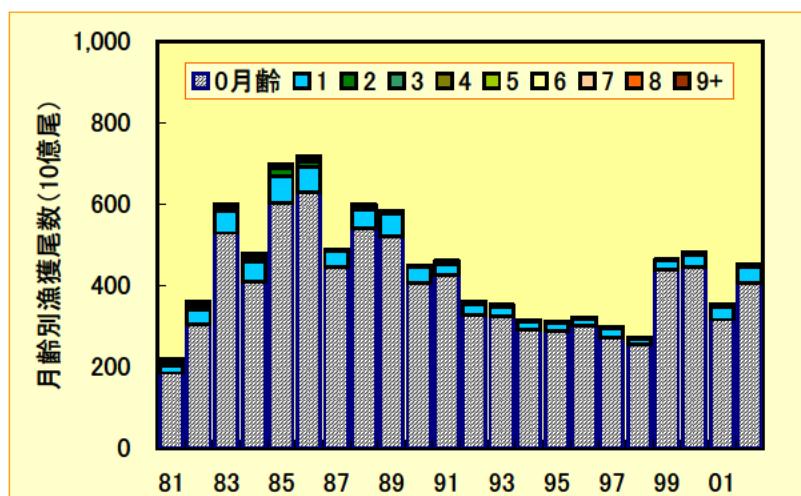


図 7 月齢別漁獲尾数の経年推移

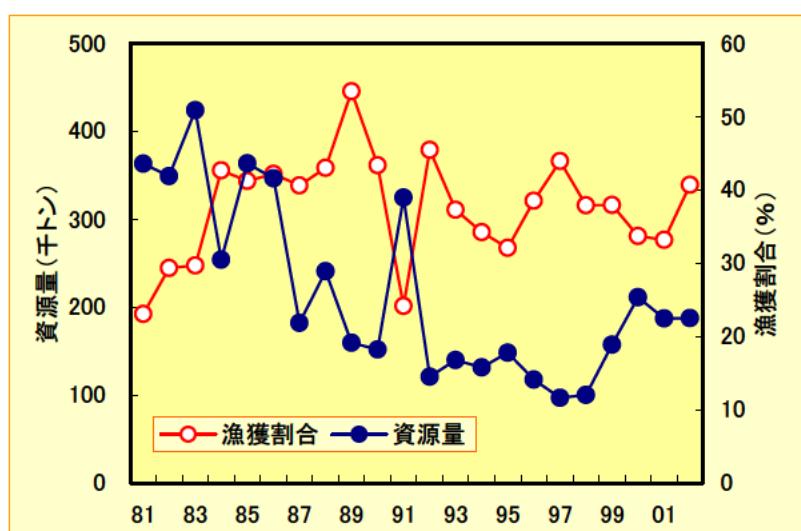


図 8 コホート解析によって推定された資源量と漁獲割合の経年推移

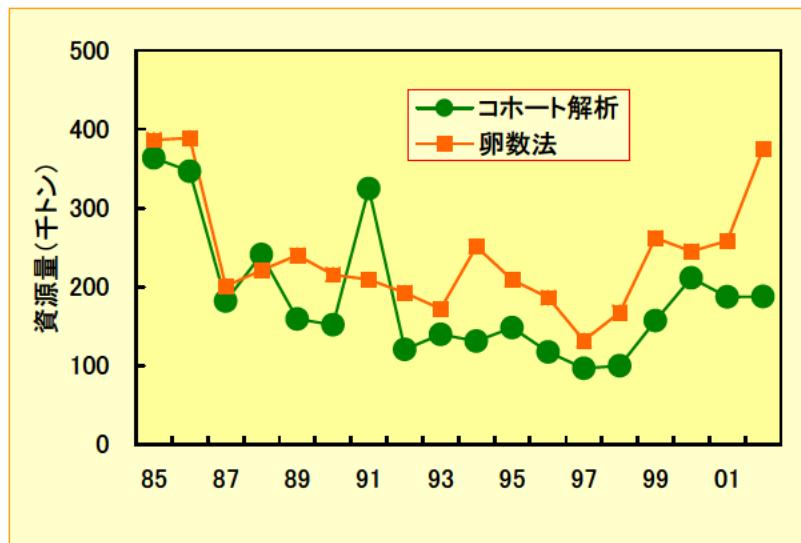


図9 コホート解析と卵数法によって推定された資源量の経年推移

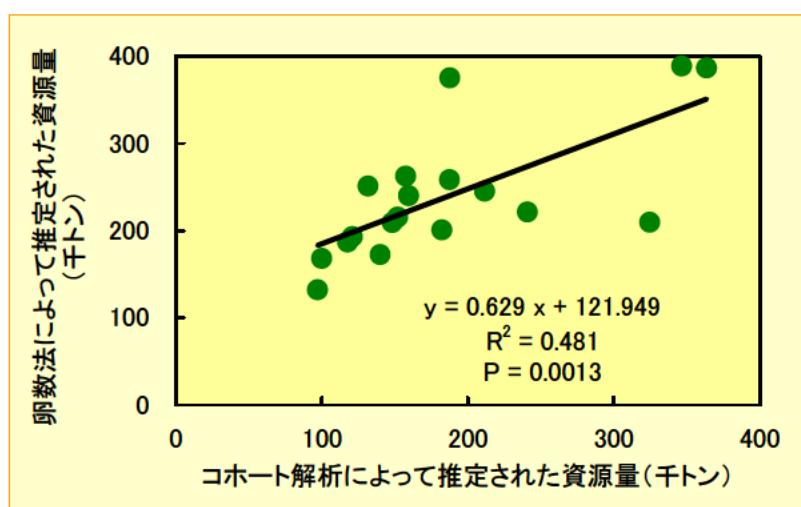


図10 コホート解析と卵数法によって推定された資源量の相関

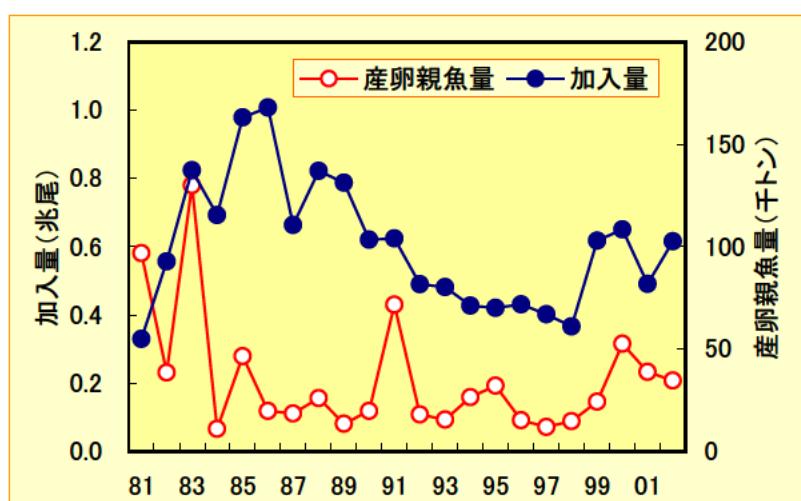


図11 加入量と産卵親魚量の経年推移

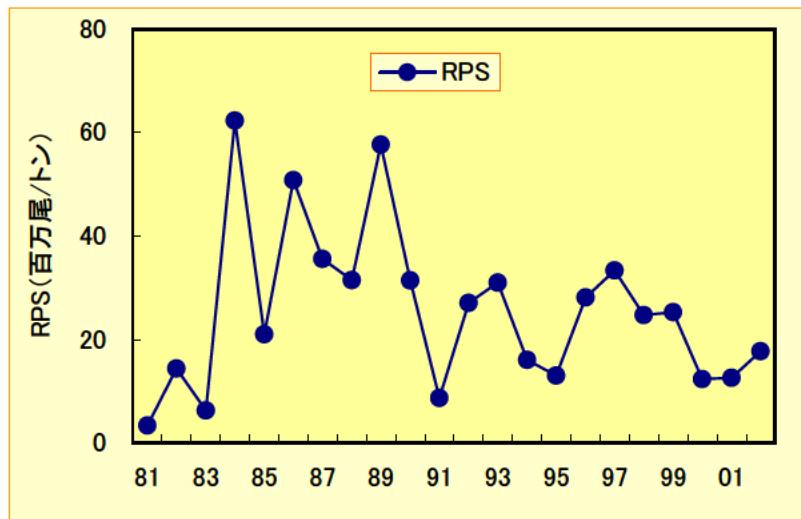


図 12 RPS の経年推移

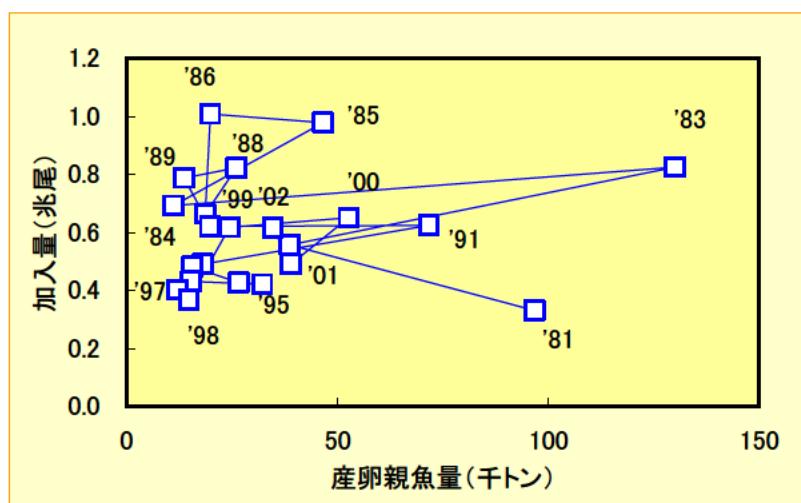


図 13 再生産関係

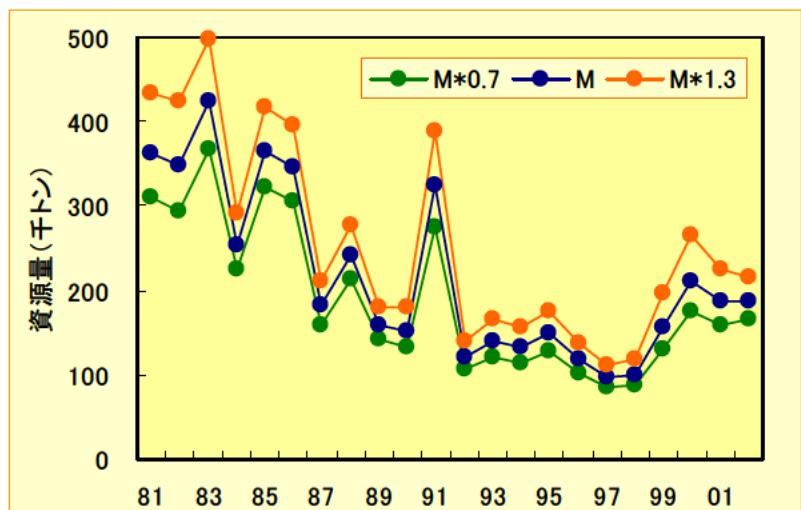


図 14 M の変化が資源量に及ぼす影響

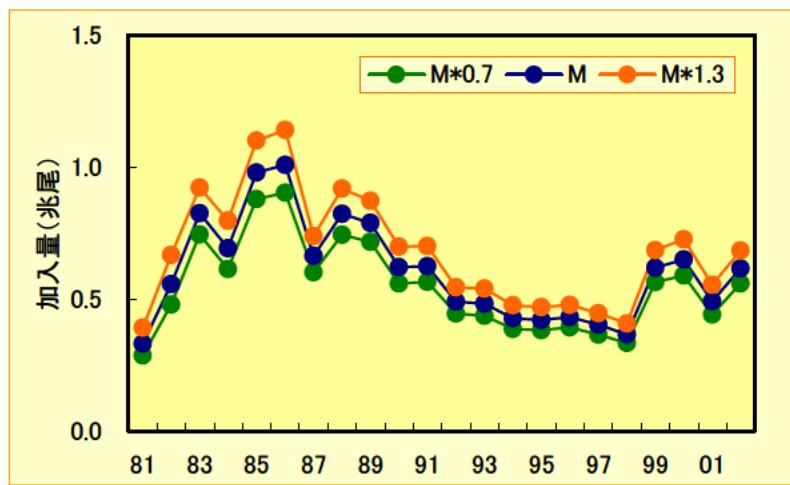


図 15 M の変化が加入量に及ぼす影響

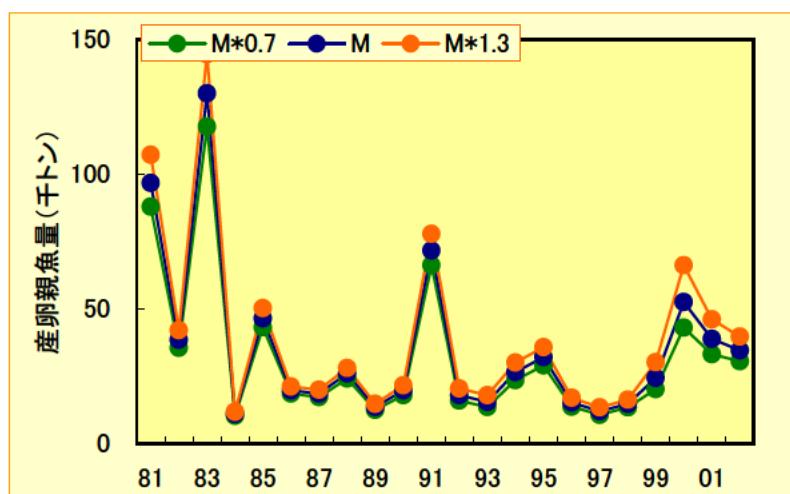


図 16 M の変化が産卵親魚量に及ぼす影響

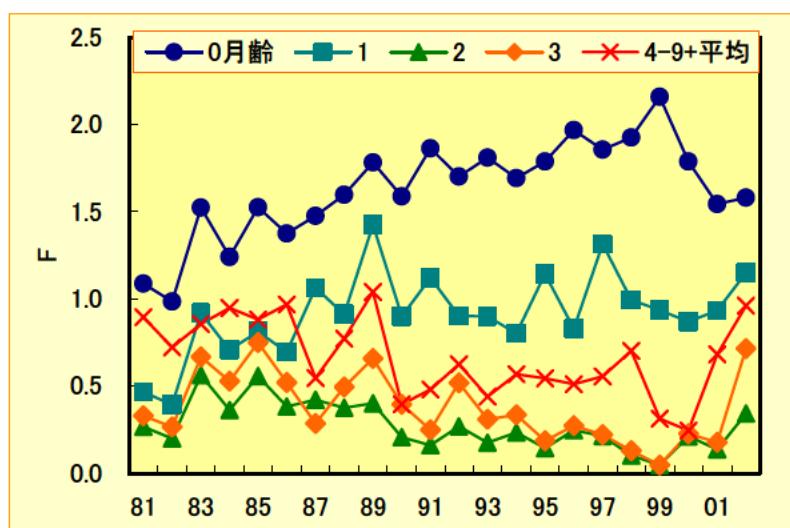


図 17 F の経年推移

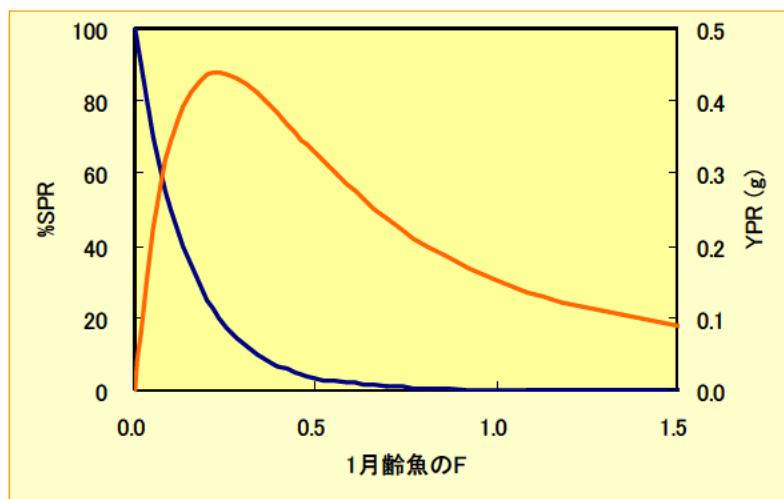


図 18 %SPR と YPR

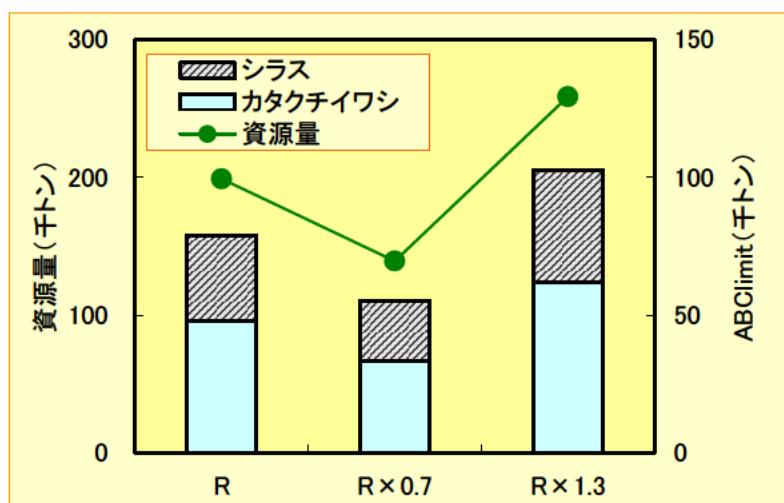


図 19 加入尾数 R を変化させた場合の 2004 年の資源量と ABC<sub>limit</sub>

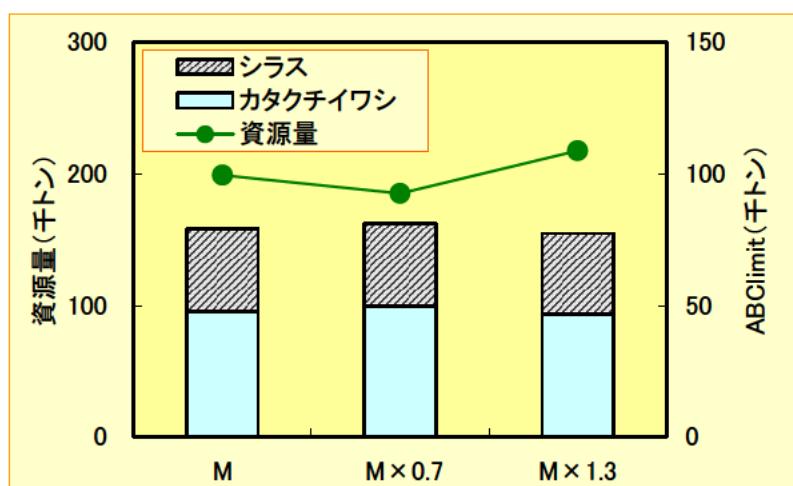


図 20 M を変化させた場合の 2004 年の資源量と ABC<sub>limit</sub>

## 補足資料 1

### 1. コホート解析

1981～2002 年のカタクチイワシとシラスの月別月齢別漁獲尾数を推定し、コホート解析によって月別月齢別資源尾数を計算した。

カタクチイワシの月別月齢別漁獲尾数は瀬戸内海の各海域の漁獲量、主要漁協の月別漁獲量、各月の体長組成と体長体重関係式から求めた。シラスの月別月齢別漁獲尾数は瀬戸内海の各海域の漁獲量、主要漁協の月別漁獲量、月齢別重量組成（0 月齢：1 月齢 = 0.66:0.34）と月齢別平均体重から求めた。カタクチイワシの月別月齢別漁獲尾数とシラスの月別月齢別漁獲尾数を合計し、月別月齢別漁獲尾数とした。シラスの月齢別重量組成は 1981 年、1985 年、1990 年、1992 年と 1999 年の瀬戸内海におけるカタクチシラスの体長組成と月齢別平均体重（付表 6）から推定した。漁獲統計ではシラスはカタクチシラス、マシラス等を込みにして「しらす」として報告されている。瀬戸内海で漁獲される「しらす」はカタクチシラスがほとんどであると考えられるが、1970 年代半ばから 1990 年までと 1995 年には紀伊水道の春漁でマシラスの割合が増加したことが報告されている（武田 1995a, 武田 1995b）。そこで 1981～1990 年と 1995 年のシラスの漁獲量については、魚種別重量組成から推定したマシラス漁獲量を除いた値を用いた。

成長式から求めた各月齢の体長範囲、平均体重、成熟率および Chen and Watanabe (1989) の方法により計算した自然死亡係数  $M$  を付表 6 に示した。瀬戸内海では全長 10mm 程度からシラスとして漁獲され始める（辻野・渡 2001、斎浦・東海 2003）。ここでは孵化後 0.5 ヶ月（標準体長 13mm）で加入すると仮定した。月別月齢別資源尾数は Pope(1972) の近似式を用いて計算した。

$$N_{a,m} = N_{a+1,m+1} \exp(M_a) + C_{a,m} \exp(M_a/2)$$
$$F_{a,m} = -\ln\{1 - C_{a,m} \exp(M_a/2)/N_{a,m}\}$$

ここで  $N_{a,m}$  は  $a$  月齢魚 ( $a=0$ ～ $8$  月齢) の  $m$  月の資源尾数、 $C_{a,m}$  は  $a$  月齢魚 ( $a=0$ ～ $8$  月齢) の  $m$  月の漁獲尾数、 $M_a$  は  $a$  月齢魚の自然死亡係数、 $F_{a,m}$  は  $a$  月齢魚の  $m$  月の漁獲死亡係数である。9 月齢以上を一つの月齢群（9+ 月齢）として扱い、8 月齢と 9+ 月齢魚にかかる漁獲死亡係数は同じであると仮定した。8 月齢魚  $m$  月の資源尾数  $N_{8,m}$  と 9+ 月齢魚  $m$  月の資源尾数  $N_{9+,m}$  は以下の式により計算した。

$$N_{8,m} = C_{8,m}/(C_{9+,m} + C_{8,m}) \quad N_{9+,m+1} \exp(M_{9+}) + C_{8,m} \exp(M_{9+}/2)$$
$$N_{9+,m} = C_{9+,m}/(C_{9+,m} + C_{8,m}) \quad N_{9+,m+1} \exp(M_{9+}) + C_{9+,m} \exp(M_{9+}/2)$$

最近月（ $m$  / 月）の資源尾数  $N_{0,m}$ 、 $a$  月齢魚（0～9+）の資源尾数  $N_{a,m}$  については以下の式により計算した。

$$N_{a,m} = C_{a,m} \exp(M_a/2) / \{1 - \exp(-F_{a,m})\}$$

ここで  $C_{a,m}$  は  $a$  月齢魚（0～9+）の最近月（ $m$  / 月）の漁獲尾数、 $F_{a,m}$  は  $a$  月齢魚（0～9+）の最近月（ $m$  / 月）の漁獲死亡係数である。

0～8 月齢の最近月（ $m$  / 月）の漁獲死亡係数  $F_{a,m}$  は最近 3 ヶ月の  $F$  の平均値とした。9+ 月齢魚の最近月（ $m$  / 月）の漁獲死亡係数  $F_{9+,m}$  は 8 月齢魚の  $F$  と等しくなるような値を探索的に求

めた。

### 引用文献

- Chen, S. and S. Watanabe (1989). Age dependence of natural mortality coefficient in fish population dynamics. Nippon Suisan Gakkaishi, 55, 205-208.
- Pope, J. G. (1972). An investigation of the accuracy of virtual population analysis using cohort analysis. Int. Comm. Alt. Fish. Res. Bull., 9, 65-74.
- 斎浦耕二・東海 正(2003). ポケット網実験から推定したカタクチイワシシラスに対する船曳網の網目選択制. 日本水産学会誌, 69, 611-619.
- 武田保幸 (1995a). 近年の薩南～紀伊水道におけるマシラスの漁獲動向. 南西外海の資源・海洋研究, 11, 7-15.
- 武田保幸 (1995b). シラス混獲率調査による春季カタクチシラスの漁況予測 (要旨). 第1回瀬戸内海資源海洋研究会報告, 南西海区水産研究所, 57-60.
- 辻野耕実・渡 智美 (2001). 大阪湾におけるカタクチシラスの成長. 大阪府立水産試験場研究報告, 13, 11-18.

### 2. 卵数法

表層水温データが整備されている 1985～2002 年について、水温情報と月別産卵量を用いる方法（錢谷ら 2001）によって月別産卵親魚量を推定した。瀬戸内海の被鱗体長 8～10cm のカタクチイワシにおいては次の式が成り立つ。

$$RBF = -335.504 \times \ln(T) + 1216.452 \\ I = -0.105 \times T + 4.030 \quad (20 \leq T \leq 26)$$

ここで  $T$  は標本採集点における表層水温（℃）、 $RBF$  は体重 1g 当たりの 1 回当たり産卵数（粒）、 $I$  は産卵間隔（日）である。したがって雌雄比が等しいと仮定したとき、月別産卵親魚量（ $B$ ：トン）は以下の式で表される。

$$B = 2 \times E \times I \times 10^{-6} / (RBF \times D)$$

ここで  $E$ ：月別産卵量（ $D$  日当たり産卵量：粒）である。 $RBF$ 、 $I$  は表層水温 20～26 の範囲で利用可能である。したがって月平均水温がその範囲にある 6～11 月について月別産卵親魚量を推定し、その連続 3 ヶ月の合計が最多となるときの平均をその年の産卵親魚量とした。連続 3 ヶ月の平均をとったのは卵の集中分布により月別産卵親魚量の推定値が過大となる影響を弱めるためである。

1985～2002 年の未成魚の資源量については渡部（1983）の方法により計算した。まず以下の式により 0 歳魚の漁獲死亡係数  $F_{0,y}$  を計算した。

$$C_{0,y} / N_{1,y+1} = F_{0,y} / (F_{0,y} + M) \times \{ \exp(F_{0,y} + M) - 1 \}$$

ここで  $C_{0,y}$  は 0 歳魚の  $y$  年の漁獲尾数、 $N_{1,y+1}$  は 1 歳魚の  $y+1$  年の資源尾数（= 産卵親魚資源尾数）、 $M$  は 0 歳魚の  $y$  年の自然死亡係数である。 $C_{0,y}$  についてはコホート解析で使用した月別

月齢別漁獲尾数を合計して求めた。0歳魚の2003年の漁獲尾数の $C_{0,2003}$ については2002年と同じと仮定した。 $N_{1,y+1}$ については産卵親魚量 $P_{1,y+1}$ (トン)を用い、産卵親魚の被鱗体長を10cm、体重10.3gと仮定し、以下により算出した。

$$N_{1,y+1} = P_{1,y+1} \times 10^6 / 10.3$$

$M$ については0月齢から11月齢の合計値2.82を使用した(付表6)。次に以下の式により $N_0$ を求めた。

$$N_{0,y} = N_{1,y+1} / \exp\{ - (F_{0,y} + M) \}$$

$P_{0,y}$ については以下のように求めた。まず、コホート解析で用いた各年の月別月齢別漁獲尾数データと月齢別成熟率(付表6)から各年の未成熟個体の月齢別漁獲尾数組成を求めた。次に、これと各年の $N_{0,y}$ の月齢別組成が比例していると仮定し、各年の $N_{0,y}$ を各月齢に案分した。これに各月齢の平均体重(付表6)を乗じ、合計したものを $P_{0,y}$ とした。

0歳魚の2002年の資源尾数 $N_{0,2002}$ を推定する際、2003年の産卵親魚量 $P_{1,2003}$ が必要であるが、その予測は困難である。次善の策として2003年の産卵親魚量は最近2年間(2001~2002年)の平均値134,987トンと仮定した。

#### 引用文献

- 渡部泰輔(1983).卵数法.水産資源の解析と評価 その手法と適用例(石井史夫(編))、恒星社厚生閣、9-29.
- 銭谷 弘・河野悌昌・塚本洋一(2001).水温情報を用いた卵数法による瀬戸内海カタクチイワシの資源量推定法.水産海洋学会研究発表大会講演要旨集, 28-29.

#### 3. 産卵量の計算

我が国周辺漁業資源調査以前から各府県水産試験研究機関による丸特Bネットおよび改良型NORPACネットの鉛直曳きによる卵稚仔調査が実施されており、本調査は産卵期をほぼ網羅するように計画されている。これらの結果を用い、銭谷・河野(2000)に基づいて月別産卵量を算出し、各月の値を合計して年間産卵量を推定した。平均孵化日数については服部(1983)の式に従った。卵期の平均生残率については銭谷ら(1995)中の渡部(未発表)の値0.600を用いた。

#### 引用文献

- 服部茂昌(1983)カタクチイワシ卵の発育速度と温度との関係.第15回南西海区ブロック内海漁業研究会報告, 59-64.
- 銭谷 弘・石田 実・小西芳信・後藤常夫・渡邊良朗・木村 量(編)(1995)日本周辺水域におけるマイワシ、カタクチイワシ、サバ類、ウルメイワシ、およびマアジの卵仔魚とスルメイカ幼生の月別分布状況:1991年1月~1993年12月.水産庁研究所資源管理研究報告シリーズA-1, 368pp.
- 銭谷 弘・河野悌昌(2000)瀬戸内海におけるカタクチイワシの産卵状況について(1980~1999年).第31回瀬戸内海東部カタクチイワシ等漁況予報会議および第17回瀬戸内海西部浮

魚分科会会議報告、77-83 .

## 付表

付表1 濑戸内海におけるカタクチイワシとシラスの漁獲量（万トン）の経年変化

	年	1955	1956	1957	1958	1959	1960	1961	1962	1963	1964	1965	1966
カタクチイワシ	東部	3.66	4.80	5.31	3.63	4.94	5.80	4.95	5.69	3.43	2.78	4.33	4.40
	西部	3.47	2.78	2.42	2.53	1.76	2.59	1.72	1.93	1.61	2.04	1.40	2.77
	合計	7.13	7.57	7.73	6.16	6.70	8.39	6.67	7.62	5.04	4.82	5.73	7.17
シラス	東部	0.31	0.25	0.39	0.37	0.43	0.46	0.61	0.62	0.31	0.89	0.62	0.92
	西部	0.14	0.08	0.07	0.10	0.08	0.08	0.03	0.08	0.10	0.06	0.04	0.04
	合計	0.45	0.33	0.45	0.47	0.51	0.53	0.64	0.70	0.41	0.94	0.66	0.96
	年	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974	1975	1976	1977	1978
カタクチイワシ	東部	4.21	3.84	6.20	4.22	3.06	3.23	4.37	4.08	3.47	3.66	4.68	1.47
	西部	2.50	3.44	3.43	3.58	3.68	5.83	4.01	3.70	4.53	5.54	6.02	4.42
	合計	6.70	7.28	9.63	7.80	6.74	9.06	8.39	7.78	8.00	9.20	10.70	5.89
シラス	東部	0.93	1.08	0.75	0.67	0.95	1.38	1.55	1.22	1.36	2.43	1.04	1.18
	西部	0.01	0.03	0.04	0.08	0.06	0.07	0.07	0.06	0.06	0.09	0.12	0.04
	合計	0.94	1.11	0.78	0.75	1.01	1.45	1.63	1.27	1.42	2.51	1.15	1.23
	年	1979	1980	1981	1982	1983	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990
カタクチイワシ	東部	0.47	0.46	2.67	3.14	3.76	2.98	4.42	3.70	0.51	0.62	0.47	0.49
	西部	4.14	3.55	4.09	4.47	4.33	4.52	5.55	5.50	3.09	5.14	3.56	2.66
	合計	4.61	4.01	6.75	7.61	8.09	7.50	9.97	9.29	3.60	5.76	4.03	3.15
シラス	東部	1.11	1.03	1.23	1.62	3.43	2.51	3.80	4.05	2.69	2.88	3.21	2.27
	西部	0.34	0.22	0.40	1.01	1.07	0.84	1.23	1.29	1.11	1.73	1.30	1.17
	合計	1.45	1.25	1.63	2.63	4.50	3.34	5.02	5.34	3.80	4.62	4.51	3.44
	年	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998	1999	2000	2001	2002
カタクチイワシ	東部	0.60	0.26	0.24	0.34	0.29	0.18	0.24	0.19	0.76	1.16	0.66	1.15
	西部	3.63	2.47	2.25	1.71	1.98	1.80	1.77	1.46	1.51	2.49	2.92	3.11
	合計	4.23	2.73	2.49	2.05	2.26	1.98	2.01	1.65	2.27	3.65	3.58	4.26
シラス	東部	2.68	1.90	1.86	1.83	1.70	1.80	1.52	1.39	2.70	2.37	1.80	2.25
	西部	0.94	0.87	0.87	0.63	0.80	0.76	0.75	0.76	1.01	1.11	0.84	1.13
	合計	3.62	2.77	2.73	2.46	2.50	2.56	2.27	2.14	3.71	3.48	2.64	3.38































付表5 2004年におけるカタクチイワシ・シラス別のABC<sub>limit</sub>とABC<sub>target</sub>

		漁獲量（トン）	
		合計	カタクチイワシ
		シラス	
ABC <sub>limit</sub>	78,978	47,767	31,211
ABC <sub>target</sub>	78,280	52,739	25,541
R×0.7	ABC <sub>limit</sub>	55,284	33,437
	ABC <sub>target</sub>	54,796	36,917
R×1.3	ABC <sub>limit</sub>	102,671	62,097
	ABC <sub>target</sub>	101,764	68,561
M×0.7	ABC <sub>limit</sub>	81,134	49,556
	ABC <sub>target</sub>	83,770	57,403
M×1.3	ABC <sub>limit</sub>	77,366	46,489
	ABC <sub>target</sub>	73,687	48,940
			24,747

Rは加入尾数、Mは自然死亡係数

付表6 各月齢の被鱗（標準）体長範囲、平均体重、成熟率と自然死亡係数M

月齢	体長範囲 (cm)	平均体重 (g)	成熟率	M
0	1.3-3.1	0.056	0	0.469
1	3.2-5.2	0.592	0	0.353
2	5.3-6.1	1.618	0	0.289
3	6.2-7.0	2.624	0	0.249
4	7.1-7.8	3.998	0	0.222
5	7.9-8.5	5.364	0	0.202
6	8.6-9.1	7.027	0.5	0.187
7	9.2-9.6	8.413	0.7	0.176
8	9.7-10.1	9.980	1	0.167
9	10.2-10.5	11.739	1	0.167
10	10.6-10.9	13.293	1	0.167
11	11.0-11.2	14.549	1	0.167
12	11.3-11.5	15.886	1	0.167
13	11.6-11.8	17.305	1	0.167
14	11.9-12.0	18.811	1	0.167
15	12.1-12.3	19.864	1	0.167
16	12.4-12.4	20.957	1	0.167
17	12.5-12.5	21.519	1	0.167
18	12.7-12.8	23.268	1	0.167
19	12.9-12.9	23.872	1	0.167
20	13.0-13.0	24.488	1	0.167
21	13.1-13.1	25.114	1	0.167
22	13.2-13.2	25.751	1	0.167
23	13.3-13.3	26.399	1	0.167
24	13.4-13.4	27.059	1	0.167